

風しんの予防接種を受けるに当たっての説明

○必ずお読みください。

風しん排除にむけて

平成 20 年以降、早いペースで風しん患者報告件数が増えてきています。その内訳をみるとすべての風しん患者の約 70%が男性。そして男性患者の約 80%は、20～40 代です。また、女性患者の約 75%も 10 代後半～30 代となっています。免疫の調査結果からも、20 代～40 代の男性の約 15%に風しんの免疫がなく、女性の約 15%は、風しんの免疫がないまたは、不十分であることがわかっています。

風しんは、抗体を持たない又は低い抗体価の妊娠中の女性がかかると、赤ちゃんに難聴や心疾患、白内障や緑内障（先天性風しん症候群）などが起こる可能性があります。平成 25 年の流行時に比べ罹患者数は減少していますが、企業での集団発生も複数報告されているため、大人の風しんワクチン（任意）の積極的接種をお勧めします。

1 風しんの症状について

○ 風しん

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。ウイルスに感染してもすぐには症状が出ず、約 14～21 日の潜伏期間がみられます。その後、麻疹より淡い色の赤い発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる（眼球結膜の充血）などの症状がみられることもあります。子どもの場合、発しんも熱も 3 日程度で治ることが多いので「三日ばしか」と呼ばれることがあります。合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者約 3,000 人に 1 人、脳炎は患者約 6,000 人に 1 人ほどの割合で合併します。大人になってからかかると子どもの時より重症化する傾向が見られます。

妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、聴力障害などの障がいを持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。

2 予防接種の効果と副反応について

予防接種を受けた 95%以上が免疫を獲得することができます。体内に免疫ができると、風しんにかかることを防ぐことができます。

ただし、予防接種により、軽い副反応がみられることがあります。また、極めて稀ですが、重い副反応がおこることがあります。予防接種後にみられる反応としては、下記のとおりです。

① 麻疹風しん混合ワクチンの主な副反応

（風しんの予防接種を同時に実施するときに使用、通常このワクチンを接種します。）

主な副反応は、発熱（接種した者のうち 20%程度）や、発しん（接種した者のうち 10%程度）です。これらの症状は、接種後 5～14 日の間に多くみられます。接種直後から翌日に過敏症状と考えられる発熱、発しん、掻痒（かゆみ）などがみられることがありますが、これら

稀に生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状（ショック症状、じんましん、呼吸困難など）、急性血小板減少性紫斑病（紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等）、脳炎及びけいれん等が報告されています。

(風しんの予防接種のみを実施するときに使用)

稀に生じる重い副反応としては、ショック、アナフィラキシー様症状があり、また、急性血小板減少性紫斑病（100 万人接種当たり 1 人程度）が報告されています。

○ 予防接種法に基づかない接種（任意接種）として取り扱われます。その接種で健康被害を受けた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく救済を受けることになります。

また、以下の状態の場合には予防接種を受けることができません。

- ① 明らかに発熱（通常 37.5℃以上をいいます）がある場合
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ③ 受けるべき予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある場合
- ④ 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合及び免疫抑制をきたす治療を受けている場合
- ⑤ **現在、妊娠している場合**
- ⑥ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

なお、接種後 2 か月間は、妊娠を避けることが必要です。